

Case Study 2

● 機能訓練指導員 ●

あん摩マッサージ指圧師

入所者の「心の理解者」になること

生活の質を高めるために、機能訓練だけでなく、さまざまな場面で貢献しています。



寝たきりゼロに近づける努力

電車を2回乗り換え、約1時間をかけて出勤する申性卓さん（35歳）の一日は、約50名の入所者のリハビリ日誌に目を通し、介護員からの夜間の申し送りなどを勘案して、その日のおおよその仕事のスケジュールを立てることから始まります。午前中は集団レクリエーションや手芸リハビリ等を支援する一方で、一人ひとりの入所者の様子を見ながら理学・運動療法的な機能訓練を実施します。昼食の介助を経て、午後からは、入所者のベッドサイドを訪ねて、機能訓練・マッサージを実施します。その後、パソコンを使用して一人ひとりの訓練内容や身体的状況を記録し、夜間を担当するスタッフに入所者の様子を伝えます。そして週に1～2回、理学療法士とともに入所者個々の身体的評価を行い、機能訓練の方向性や具体的内容を検討・決定しています。さらに、入所者の生活の質を向上させるために、できるだけ離床させて個々の状況に即した車椅子の調整、福祉用具の選定などを行っています。「自ら起き、ベッドを離れて行動することで入所者の生活の質は劇的に向上します。身体の機能訓練、マッサージ、車椅子の調整など、些細なことですが、それを積み重ねることによって寝たきりゼロに近づきたい」と申さんは話しています。

■プロフィール

申 性卓さん（35歳）
（障害等級2級）



しん・そんたく 1971年、大阪府出身。大学4年の時、風邪による高熱のために視神経が萎縮し、中心部の視野を欠損。現在両眼での視力は0.01から0.02の間。都立文京盲学校を卒業後、約3年半、診療所でリハビリテーションの仕事に携わる。05年9月から当施設で機能訓練指導員として働き始める。

入所者の立場で、ひたむきに取り組む

申さんが障害を受けたのは、卒業を間近に控えた大学4年の時でした。1週間ほど続いた風邪による高熱により視神経が萎縮し、視力をほとんど失ってしまったのです。6年を要して大学を卒業し、一般企業への

社会福祉法人恩賜財団 東京都同胞援護会 特別養護老人ホーム ゆたか苑

所在地：東京都豊島区長崎3-26-4



同僚からのメッセージ

介護職員

庄司 早苗さん

申さんは入所者・スタッフへの心配りができ、眼差しが優しいですね。



が目標です

就職を希望しましたができませんでした。その後、都立文京盲学校に入学して、はり・きゅう・あん摩マッサージ指圧師の資格を取得しました。「実技研修などを通してさまざまな方と触れあう中で、お年寄りの力になりたいという気持ちが強くなりました。病院でのリハビリや治療院でヘルスキーパーとして働くという道もありますが……。家族を支え、社会に貢献してきたものの、年齢を重ねて身体的に無理の利かなくなったお年寄りの手助けをする仕事に就きたいと思ったのです。これは私が外国籍で、視覚障害者という2つのハンデがあることとも関係があります」と話します。家族・友人・学校関係者の協力、申さん自身の強い意思で困難を乗り越え、現在お年寄りに優しい視線を投げかけ、入所者の視点に立ち、ひたむきに機能訓練に取り組む姿があります。

周囲のスタッフとの連携を通じて

「仕事をする上で心掛けているのは、私自身何がわからないのか、何ができないのかを周囲のスタッフに伝えること。入所者の正確な身体的状況を把握し、介助するには、安全確保のためにも看護師・介護員とのコミュニケーションは必須です」。安全確保しながら機能訓練やあん摩マッサージ等の専門技術を最大限に活かすには、周囲のスタッフとの連携が必要だと強調します。「おかげで楽になったよ」、「少しずつただけど身体が動くようになった」という入所者の言葉は、申さんへのねぎらいとなり、仕事への高いモチベーションとなっています。機能訓練を通してお年寄りを支援するだけでなく、心の理解者となることが申さんの目標です。

Message



●施設長

神田 祐一(かんだ ゆういち)さん

リハビリテーションは、スタッフがチームとなって、入所者の毎日の生活の中で行われなくてはなりません。機能訓練指導員である申さんは、専門技術・知識が確かなだけでなく、コミュニケーション能力にも優れ、チームの中で中心的な役割を果たしています。また理学療法士と連携しながら、着実に成果をあげています。

周囲のスタッフの理解と最低限の心遣いがあれば、機能訓練指導員の仕事に支障は全くありません。むしろ視覚障害がある分、他人の痛みが深くわかり、利用者本位のサービスに繋がっていると感じています。

